

## 道徳科の指導と評価の在り方 —「特別の教科 道徳」の趣旨を生かして—

竹 田 敏 彦

Evaluating Guidance for Moral Education:  
Taking Advantage of the Essence of Moral Education

Toshihiko TAKEDA

### 要 旨

まず、人格の完成及び国民の育成の基盤となるものが道徳性であり、その道徳性を育てることが学校教育における道徳教育の使命であるにもかかわらず、今日まで「道徳性の育成」が道徳教育や道徳の時間の指導や評価として取り上げられることが希薄であったことを指摘した。その上で、道徳性が人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲及び態度を諸様相とする内面的資質であることから、今回の学習指導要領の改訂に伴い、道徳教育及び道徳科の目標である「道徳性の育成」が真に学校教育において機能し、達成されなければならないことを論述した。

具体的には、今後の道徳科の指導及び評価が「道徳性の育成」を踏まえて実施されなければならないことや、その妥当性が新学習指導要領の理念や内容に託されていること、理論と実践の往還によって検証されなければならないことを提言した。

キーワード：道徳科の指導と評価、道徳性の育成、考え・議論する道徳

### はじめに

「人格の完成及び国民の育成の基盤となるものが道徳性であり、その道徳性を育てることが学校教育における道徳教育の使命である<sup>1)</sup>。」道徳教育の目標が「道徳性の育成」にあることは、昭和33年に道徳の時間が特設されて以来、一貫している。にもかかわらず、「道徳性の育成」が道徳教育や道徳の時間の指導や評価として正面から取り上げられることは希薄であった。道徳性とは、「人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲及び態度諸様相とする内面的資質<sup>2)</sup>」である。

文部科学省は、平成29年に告示した新学習指導要領の中で、道徳教育及び道徳科の目標をいっそう明確で理解しやすいものにした。今回の改訂に伴い、道徳教育及び道徳科の目標が真に学校教育において機能し、高まるような取組が求められている。

## 1 学校における道徳教育の動向

平成29年文部科学省令第20号をもって、学校教育法施行規則の一部を改正する省令が制定され、また、平成29年文部科学省告示第63号及び第64号をもって、小学校学習指導要領の全部を改訂する告示及び中学校学習指導要領の全部を改訂する告示が公示された。この後、平成29年7月に「学習指導要領 解説」（総則編、特別の教科 道徳編等）が公開された。ここに、新小学校学習指導要領は平成32年4月1日から、新中学校学習指導要領は平成33年4月1日から施行されることとなった。

学習指導要領の改訂のポイントの一つが道徳教育の充実である。新学習指導要領の改訂の内容は、道徳の時間を教育課程上、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）として位置付け、発達の段階に応じ、答えが一つではない課題を一人一人の児童生徒が道徳的な問題と捉え向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へと転換を図るものである。道徳科の内容項目に関しては、いじめ問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものに見直すとともに、問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れ、指導方法の工夫を行うことが示された。

また、道徳の教科化に伴い、「評価」を行うことが義務付けられることとなった。しかし、道徳科が「特別の教科 道徳」と位置付けられているように、新学習指導要領は、他の教科のような数値による評価（評定）ではなく、文章記述による評価（個人内評価）を求めている。

## 2 道徳科の指導方法の工夫

新学習指導要領は、第1章「総則」第1「中学校教育の基本と教育課程の役割」の2（以下「教育課程の役割」という。）で、道徳を「特別の教科 道徳」として位置付け、道徳教育の目標が「道徳性を養うこと」であることを明確にした。

道徳教育の目標が「道徳性を養うこと」であることは、新旧の学習指導要領の間で変更は見られない。変更があるとすれば、道徳教育の目標がより一層明確になったことである。その文脈は次のとおりである。

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とすること。（「教育課程の役割」、下線部が変更点）

道徳教育の要として位置付けられる道徳科は、「自己としての生き方」を考え、「主体的な判断」の下に行動できるような「道徳性」を養うことが期待されている。文部科学省は、その方向性を、「読み物道徳」から「考える道徳」、「議論する道徳」へとし、児童生徒が道徳的価値に関わって多面的・多角的に考え・議論することを求めている。

### 2.1 道徳科の目標と道徳科の指導と評価

道徳科の目標は、「教育課程の役割」に示す道徳教育の目標に基づき、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる<sup>3)</sup>」ことにある。

「教育課程の役割」には、「学校における道徳教育は、特別の教科である道徳（道徳科）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、生徒の発達段階を考慮して、適切な指導を行うこと<sup>4)</sup>」とあり、「道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする<sup>5)</sup>」とある。

このことから、道徳科の指導と評価は、道徳教育の目標である「道徳性を養うこと」に基づき、道徳科の目標である「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことに焦点を定めて行われる必要がある。

## 2.2 道徳性を養うことを意図した道徳科授業の工夫

### 2.2.1 道徳性の捉え

道徳性とは、「人間としての本来的な在り方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にする人格的特性」「人格の基盤をなすもの」「人間らしいよさ」「道徳的諸価値が一人一人の内面において統合されたもの」「人間が他者と共によりよく生きていく上で大切にしなければならないもの」とされている<sup>6)</sup>。

### 2.2.2 道徳性の発達段階

「道徳性」を養うためには、道徳性の発達段階を意図しなければならない。道徳性認知発達理論の研究の第一人者である荒木（2015）は、次のように述べている。

ローレンス・コールバーグ（Lawrence Kohlberg）が1958年に提出した学位論文「The development of modes of moral thinking and choice in the years 10 to 16.」によって道徳性認知発達理論が明らかにされて以来、世界各国でその理論的、実証的研究が多く心理学者、教育学者を巻き込んで精力的に展開されてきた<sup>7)</sup>。

また櫻井（1997）は、コールバーグの道徳性の発達段階を次のように解りやすく紹介している<sup>8)</sup>。

#### 【水準Ⅰ：前慣習的水準】

〔段階1〕罰や制裁を回避し、権威に対して盲目的に服従する志向

この段階の子どもは、叱られたり、罰せられたりすることが悪であり、それを避けることを目的にして判断し、行動する。（以下省略）

〔段階2〕個人的欲求満足、平等な交換への志向

この段階の子どもは、ひたすら自分の利益や報酬を求め、平等な交換（自分が助けてもらったら相手を助ける、相手が助けてくれなかったら自分も助けない等）によって自己の欲求を満足させる行為を正しい行為と考えている。（以下省略）

#### 【水準Ⅱ：慣習的水準】

〔段階3〕よい子志向、よい人間関係への志向

この段階の子どもは、よい対人関係をつくることを正しい行為であると考えている。つまり、家族、先生、友達など周囲の人々から望まれ、承認される行為は善い行為だが、承認されない行為は悪い行為であるとする。（以下省略）

〔段階4〕法と社会秩序維持、集団の利益への志向

この段階の子どもは、社会あるいは集団の利益に貢献する行為を善い行為であるとする。義務や責任を果たすこと、権威を敬い、社会秩序を維持することを正しいことであるとする。

(以下省略)

【水準Ⅲ：脱慣習的、原則的水準】

〔段階5〕社会契約的な法律、個人の権利志向

この段階の人物は、一般的な個人の権利や社会全体から批判的に検討され、同意を得てきた規範に照らし合わせて善悪を判断する。(以下省略)

〔段階6〕良心または倫理原則への志向

この段階の人物は、行為が社会的原則に合致するかどうかだけでなく、論理的な普遍性や一貫性に照らして倫理原則に合うかどうかを善悪の判断の基準にしている。(以下省略)

### 2.2.3 青年期における道徳性

Larry Nucci (カリフォルニア大学) は、『青年期における道徳性のU字型発達』の中で、青年期初期(中学生の時期,13～14歳)がアルファベットのU字の最も底に当たる、規範に背を向ける最悪の段階だと述べ、次のような道徳性の発達段階を提示している<sup>9)</sup>。

I 「慣習肯定」の段階(児童期) — 小学生

II 「慣習否定」の段階(青年期初期) — 中学生

☆ルール・規則が権威の恣意的な命令として見なされ拒否される段階

☆退行期と思われる過渡的な段階(道徳的状况を曖昧に捉えるようになる時期)

☆道徳行動の漸減期

☆青年期初期に生じる社会認知的変化をどのように見越してうまく利用するのかということが道徳教育への問いかけとなる。

☆「ルールだから」ではなく、「何がフェアなのか」「どうすることがフェアなのか」を考えさせることが大切になる。

III 「慣習が社会の調和に重要なものとして肯定される」段階(青年期中期) — 高校生～

### 2.2.4 道徳性を養うための手立て

#### ①対話の成立

道徳性を養うためには「対話」が不可欠である。道徳科における「対話」は、ソクラテス的問答(「聞く」「答える」「問い返す」)が相応しい。そのポイントは次のとおりである<sup>10)</sup>。

○対話(ギリシア語dialogos、英語dialogue)の形式で、相手方の議論を逐一吟味し、その中に含まれる矛盾や行き詰まりを自覚させ、より正しい道に沿って自分で真理を発見させる。(ソクラテスの「魂の助産術」)

○対話(dialogos)はlogos(言葉、理性、道理、真理、真相)をdiaする(分かちもつ)ということ

○対話(dialogos)のプロセスによって、対話者相互が当初もっていたそれぞれの狭い主観的見解を突破し、お互いが十分に納得できる立場、さらには事の道筋・道理から誰もが認めざるを得ないような立場に近づくことになる。(妥当性の高い倫理的見解を共有)

#### ②倫理的善の追究

倫理的善とは自分にとってだけの善ではなく、また自分が直接関与する人々にとっての善だけでなく、ありうるすべての他者一般にとって善と判断されるような善のことをいう。倫理的善の追究は道徳科授業において道徳的価値を追求するプロセスそのものである。

## 2.3 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度の育成

### 2.3.1 道徳的判断力と道徳的思考のプロセス

#### ①一人学びの場の設定〔個人思考〕

道徳的な判断力を育成するためには、まず、自己の考えをもたせることが大切である。生徒指導の三機能にいう「自己決定」である。その際、判断の理由付けを重視する必要がある。

#### ②相互作用（対話）の場の設定〔集団思考〕

次に、自己の考えを基に他者の考えとすり合わせることによって、道徳的思考を深めさせることが重要である。その際の指導方法として次のことが大切になる。

○ペアトーク・グループトーク・クラストークなどによって、生徒指導の三機能の一つである「共感的な人間関係」「自己存在感」や論理力（論理的思考力・論理的判断力・論理的表現力）を育成すること。

○授業者がパイロット役（ファシリテーター役）を担うこと。決して授業者が児童生徒に特定の価値観を押し付けたり、特定の価値観に誘導したりすることではない。授業者が、児童生徒の答えが一つではない課題に対して道徳的に向き合い、考え、議論することができるように相互作用（対話）を促進する役割を果たすことである。

### 2.3.2 道徳性の発達段階を意図した授業展開

児童生徒の道徳性の発達段階を予め想定しておき、中心発問に対する「予想される児童生徒の反応」を発達段階別に学習指導案に明記しておくことが、道徳的思考（道徳的価値に基づく思考）を深めさせることになる。その際の留意事項として、次のことが大切になる。

○道徳性の発達段階の違いによる意図的指名

○議論を中心にした授業の組立←根拠（理由）に基づく意見の交流〔対話〕

○道徳的思考を深めさせる発問←多面的・多角的な思考を可能にする発問

### 2.3.3 道徳資料（道徳科教科書）の教材研究と活用方法

①道徳資料（道徳科教科書）は「道徳的場面・状況（←道徳的行為が求められる場面・状況）」がしっかり描かれていることが重要

②道徳資料（道徳科教科書）の教材研究と活用方法の検討

道徳科授業の是非は、児童生徒が道徳資料（道徳科教科書）の中に具体的に描かれた道徳的場面・状況に立って、主人公がとった具体的な行為の意味を児童生徒の日常の場面・状況に結びつけて考えることを可能にするような道徳資料（道徳科教科書）の構造や、指導者の道徳資料（道徳科教科書）の活用能力にかかっている。このような道徳科授業の積み重ねが、児童生徒の道徳性（道徳的な判断力・心情・実践意欲と態度）を高めることになる。

## 2.4 問題解決的な学習を取り入れた工夫

これまでの道徳授業は、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導になりがちであった。これからは、児童生徒に特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものとして、改善されなければならない。ここに問題解決的な学習が取り入れられなければならない理由がある。そのポイントは次のとおりである。

○多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質であること。



段階	展開の視点と発問	生徒の活動と予想される反応	指導上の留意点及び支援の観点
展 開	<p>3. 道徳的葛藤討議</p> <p>◎二つの手紙を見せられた佐々木さんはなぜ「納得がいかない」と言って憤慨したのでしょうか。元さんのとった判断・行動は正しいと思いますか、間違っていると思いますか。</p> <p>理由を付けてワークシートに記述(自己決定)し、そのことを基にグループトーク→クラストークによって考えを深めましょう。(アクティブ・ラーニング)</p>	<p>(3)元さんの立場に立った判断とその理由によって、クラストークを深める。このことを通して、元さんはどう判断すべきだったのかについて考える。</p> <p>○元さんの判断は正しい。(元さんへの懲戒処分は不当)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・姉弟が不憫でかわいそうだから。②</li> <li>・子どもの夢をかなえるのが動物園の職員の仕事だから。③</li> <li>・善意や思いやりを大切にする社会を目指すべきだから。④</li> </ul> <p>○元さんの判断は間違っている。(元さんへの懲戒処分は妥当)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・規則を破れば懲戒処分の対象になるのは当然のことだから。②</li> <li>・元さんの仕事の一つは不正な入園を防ぐことだから。③</li> <li>・個人の都合で規則を変えてはならないから。④</li> </ul>	<p>*ワークシートの活用(判断・理由)</p> <p>*自己決定・相互作用</p> <p>*教師のパイロット(ファシリテーター)</p> <p>○予め全生徒の道徳性の発達段階を想定しておく。(②③④はコールバーグの道徳性発達理論という発達段階)</p> <p>○道徳性の発達段階の違いを考慮しながら、意図的指名によって道徳的思考を深めさせる。</p>

図1. 道徳科の学習指導過程(問題解決的な学習型)

○発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の子どもたちが自分自身の問題として捉え、向き合い、考え、議論する道徳教育への転換により児童生徒の道徳性を育てること。

図1の道徳科の学習指導過程は、道徳資料「二通の手紙」を使って筆者が作成した学習指導案の展開の一部(中心発問と予想される生徒の反応)である。生徒に主人公の立場に立って考え、判断させ、判断理由の違い(道徳性の発達段階の違い)による道徳的葛藤討議に参画させることによって、道徳性の発達段階を高めることを意図した取組である。

元さんの判断(幼い姉弟を保護者同伴でなければ入園させられないとする動物園のルールを破って入園させたこと)は正しかったのかどうかの発問に対して、生徒が反応するであろう判断に対する理由(②③④…道徳性の発達段階を表している。)を予め想定しておくことによって葛藤(道徳的思考)を深めることが可能になる。主人公の立場に立って考え、判断し、表現することによって、問題解決的な学習を展開することになる。

### 3 道徳科の評価方法の工夫

学習評価の目的は、現行の学習指導要領に示されているように、「きめの細かい学習指導の充実」や「児童生徒一人一人の学習内容の確実な定着」に置かれてきた。また、学習評価の改善に関する基本的な考え方も、「学習指導の在り方を見直すこと」「個に応じた指導の充実」「学校における教育活動を組織として改善すること」に置かれてきた。

現行の学習指導要領における学習評価の意義は「児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する」こと、学習評価を踏まえた教育活動の改善は「指導と評価の一体化」にあった。

新学習指導要領は、「第3章 特別の教科 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の4において、「児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。」ことを加えた。

すなわち、新学習指導要領にいう道徳教育及び道徳科の評価は、児童生徒にとっては自分の成長を振り返る契機となるものであり、「他者との比較ではない」こと、「教師が児童生徒一人一人の人間的な成長を温かく見守る」ことによって、教師が児童生徒自身による道徳的価値に裏打ちされた人間的な成長の振り返りや道徳性の育成を支援すること、教師にとっては指導計画や指導方法を改善する手掛かりとなることとして捉えられる<sup>11)</sup>。

したがって、新学習指導要領は、道徳科の評価を5段階などの数値ではなく記述式とし、児童生徒の成長を積極的に受け止め、励ますためのものであって、他の児童生徒と比べる相対評価を否定するとともに、入試に使わないことを明らかにした。すなわち、「道徳性を養うことを学習活動として行う道徳科の指導では、その学習状況や成長の様子を適切に把握し評価することが求められる」のである<sup>12)</sup>。

道徳科に関する評価の基本的な考え方については、次のことが挙げられる<sup>13)</sup>。

- 評価は指導要録に設ける専用の記述欄に記載する。
- 「友情」「社会正義」「国や郷土を愛する態度」などの道徳の内容項目ごとではなく、全体として評価する。
- 児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止め、認め、励ますような個人内評価として記述式で行う。
- 児童生徒が他者の意見に触れたり、議論したりする中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方に発展しているかを長期的視点で評価する。
- 評価のための判断材料は、授業中の会話や感想文、教材の登場人物を自分に置き換えて問題を理解し、解決しようとする姿勢などがある。
- 「道徳的諸価値の理解」と「人間としての生き方についての考え」を、相互に関連付けることによって、深い理解、深い考えとなっていくような学習活動に着目して評価する。
- 発言や文章を書くことが苦手な児童生徒については、他者の話を聞き、考えを深めようとする姿勢に着目して評価する。

#### 4 道徳科の学習指導過程の工夫

「特別の教科 道徳」（道徳科）の趣旨を生かした学習指導過程は、「考え、議論する道徳学習」、「問題解決的な道徳学習」を意図することが求められる。

##### 4.1 道徳科の学習指導過程の基本

図2に示す学習指導過程の基本は、筆者のこれまでの研究の成果（理論と実践の往還による成果）をまとめたものである。〔大学での講義（道徳教育指導法）や、学会での道徳教育に係る発表・掲載論文、SAME（学校と道徳教育）研究会での活動、公立小中学校の道徳の校内研修会での指導助言などによる。〕

ポイントは次のとおりである。

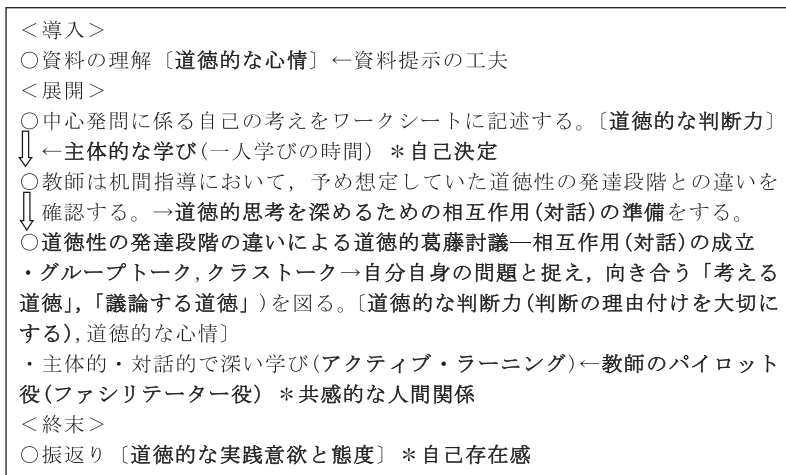


図2. 学習指導過程の基本

筆者がこれまでの研究の成果(理論と実践の往還による成果)として考案したものである。新学習指導要領の趣旨を生かした学習指導過程の基本(ポイント)となるものである。

○道徳的思考を深めるための相互作用(対話)の場面設定と実際

↓

○道徳性の発達段階の違いによる道徳的葛藤討議の場面設定と実際

↓

○自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」の展開  
(アクティブ・ラーニングの展開、生徒指導の三機能の機能化)

#### 4.2 道徳科の学習指導過程の実際

図3は、新学習指導要領で示された道徳科の指導及び評価の観点を盛り込んだ学習指導過程である。この学習指導案は筆者が庄原市立総領中学校(文部科学省研究指定校)の校内研修会で講師として指導助言の任を務めたとき(平成28年度)のものである。道徳性の発達段階を意図した道徳的葛藤討議の様子を知ることができる。

#### おわりに

今回の学習指導要領の改訂は、「いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものとする観点からの内容の改善、問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図ることなどを示したものである<sup>14)</sup>。

今後の道徳科の指導及び評価は、このことを踏まえて実施される必要があるだろう。そのベースとなるものが道徳教育及び道徳科の目標となる「道徳性の育成」である。本稿は、道徳科の指導と評価について、一貫して「道徳性の育成」との関連の重要性を指摘してきた。その妥当性は、新学習指導要領の理念や内容に託されており、このことをベースに理論と実践の往還によって検証されることになる。



**道徳科授業の実際**  
 ～ 庄原市立総領中学校教諭(岩根智子先生)の学習指導案 ～

○学年 中学校第3学年

○主題名 「励まし合い、高まり合う」[B-(8),旧2-(3)友情,信頼]

○ねらい お互いの立場の変化を乗り越え、20年前の約束を守ろうとする二人の迷いや心の揺れについて考えることを通して、友情の尊さを理解し、信頼できる友だちをもち、互いに励まし合い、高め合っていくこととする心情を育てる。 授業評価

○資料名 「二十年後」(出典:「心をつないで」教育出版)

◎中心発問と予想される生徒の反応

【中心発問】自分の手でボブを捕まえることができなかったジミーに共感できるか否か。あなたの考えを理由を付して答えなさい。

【予想される生徒の反応】\*②③④はコールバーグの道徳性の発達段階を想定

☆共感できる←友情, 信頼, 思いやり

- ・自分の手で友だちを逮捕できない気持ちはわかる。②
- ・20年前の約束を守ったし、ボブを見捨てていない。③

☆共感できない←友情, 信頼, 正義

- ・ボブのためにならない。③
- ・警察官としての職務を果たしていない。④

【道徳科授業としての評価】

\*教師のパイロット役(ファシリテーター役)は機能したか。...②←③,③←④

\*ねらいは達成できたか。 道徳性は高まったか。

判断の理由の中に道徳性が表われる。

考える道徳・議論する道徳になっていたか。

図3. 学習指導過程の実際

### 引用文献

1. 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 p.1
2. 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 p.109
3. 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 p.13
4. 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 p.8
5. 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領』 p.3
6. 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 総則編』 p.28
7. 荒木紀幸 (2015) 「兵庫教育大学方式によるモラルジレンマ授業の研究 - コールバーグ理論に基づくモラルジレンマ授業と道徳性の発達に及ぼす効果について -」 『道徳性発達研究』 9 (1) p.1
8. 櫻井育夫 (1997) 『道徳的判断力をどう高めるか - コールバーグ理論における道徳教育の展開 -』 北大路書房 pp.47-50
9. Larry Nucci (2008) 「青年期における道徳性のU字型発達」 日本道徳性発達実践学会第8回同志社大会発表論文集 pp.3-5
10. 藤井義男 (1966) 『ギリシアの古典』 中央公論社 p.78
11. 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 pp.107-108
12. 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 p.109
13. 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 pp.109-111
14. 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 p.2

[2017. 9. 28 受理]

コントリビューター：片上 宗二 教授 (心理学科)

